

哈爾濱金代文化展記念シンポジウム

「金王朝とその遺産」

—開催の趣旨—

佐藤 貴保

新潟大学超域研究機構プロジェクト「東部ユーラシア周縁世界の文化システムに関する資料学的研究」は、新潟市歴史博物館「みなとびあ」（以下、みなとびあ）特別展「^{ハルビン}哈爾濱金代文化展」の開催を記念し、平成21年10月10日に研究者向けシンポジウム「金王朝とその遺産」を新潟大学プロジェクト推進経費（助成研究A）／人文社会・教育科学系研究プロジェクト経費（学系基幹研究）「環東アジア地域におけるネットワーク群の展開と構造に関する実証的研究」との共催で実施した。北海道から四国まで全国の研究者など45名が出席し、その模様は翌11日の『新潟日報』朝刊にも掲載された。

展覧会は新潟市—中国哈爾濱市友好都市提携締結30周年を記念して、哈爾濱市金上京歴史博物館所蔵品など約100点が展示された（会期：平成21年9月12日～11月8日）。同館の展示品が国外に出展されるのは史上初、他所での巡回展示も無く、環日本海交流で実績を挙げている新潟市ならではの貴重な展覧会となった。

展覧会が扱う金王朝は、1115年に女真族（現在の満洲族）により、現在の哈爾濱市で建国された。遼・北宋王朝を滅ぼして、勢力を中国東北部からロシア沿海州や華北へ伸ばしたが、1234年にモンゴル帝国（後の元王朝）によって滅ぼされた。近年の研究で、鎌倉時代の寺泊（現長岡市）に漂着した船から見つかった符牌に書かれている文字（『吾妻鏡』所載）が、金王朝で使われていた女真文字であることが明らかになり、金王朝・女真族と新潟との結びつきに注目する研究者も少なくない。超域研究機構では、金王朝の歴史をテーマとした市民向けの講演（平成21年4月と6月に実施）、図録寄稿などのかたちで展覧会への協力を行ってきたが、両シンポジウムではより最新の研究動向をつかむため、本学関係者ばかりでなく、学外からも当該分野を専攻する講師を招聘した。

このシンポジウムでは、敢えて展示品とは直接関係のない文物や文献資料をテーマとして扱った。展示品は哈爾濱市の金の都城址から採集されたものが多数を占めるが、城址の本格的な発掘調査はまだ行われておらず、出土品の種類や年代に偏りが見られるため、展示品のみによって金王朝が諸外国や後の時代に果たした役割を理解することは困難である。そこで、研究報告によってその欠を補うことを主たる目標に据えた。藤原崇人氏（大谷大学）の報告では、都城址から発見された石刻資料等をもとに、金王朝が遼王朝の仏教を受容し、都に授戒拠点を設置して仏教教団に対する管理・統制を行っていたこと、授戒者には女真族

もいたことなどを示した。井黒忍氏（京都大学）の報告では、北東アジア地域で多数発見されている官印のデータを集積したうえで、女真族の社会・軍団の構成単位であった猛安・謀克の名称や猛安・謀克の基本構造などを分析し、先行研究の修正を行なった。榎並岳史氏（新潟大学）の報告では、南宋・金の文献資料を博捜することにより、金王朝から南宋王朝（北宋王朝の皇族が中国南部に逃れて建てた政権）へ移り住んだ人々が南宋の社会・文化の様々な側面で少なからぬ影響を与えていたことを明らかにした。そして松田孝一氏（大阪国際大学）の報告では、金王朝滅亡後のモンゴル帝国（元王朝）支配下に入った女真族が引き続き北東アジアや中国本土などで活躍し、ユーラシア史上空前の大帝国建設に貢献していたことが指摘された。4氏の報告を通じて、金王朝・女真族の存在が当該時代ならびにその後の環東アジア地域の政治・社会史に大きな影響をもたらしていたことが明らかになった。本号では、4氏のうち、藤原氏と榎並氏の論考を掲載している。

なお本シンポジウムでは、遼金西夏史研究会10周年記念事業企画委員会（代表：東北大学・渡邊健哉氏）が後援団体に加わった。平成13年に発足した遼金西夏史研究会では、年1回大会を開き、報告者の自由なテーマによる最新の研究報告が行われている。本シンポジウムでは、発足10周年記念事業に向けての試みとして、委員会側からテーマを提示してご報告の準備をお願いした。渡邊氏にはテーマの選定や当日の司会進行でご協力いただいた。

翌11日には、新潟大学とみなとびあの共催で市民向けシンポジウム「中国金の建国と女真族の社会」を新潟市万代市民会館で開催した。展示品に即した城郭・鉄器・埋蔵銭・陶磁器の研究者4名による考古学分野からの研究報告と、当時の環日本海交流をも視野に入れた総合討論会が行われ、160名強の来場者を見た。

特筆すべきは、新潟国体期間中で宿や交通手段の確保が難しいなか、金王朝史だけでなく、唐・遼・西夏・宋・元・清王朝・中華民国史や朝鮮半島史、日本史など、さまざまな研究分野の専門家が全国から来場し、議論に加わったことである。金王朝・女真族に焦点を当てたシンポジウムは、世界的に見てもあまり例がない企画であったが、金王朝の研究者のみならず、広く環東アジア地域史を専攻する研究者が、当該研究に対して大きな関心を抱いていることを示していると言えよう。これを契機として、金王朝史および環東アジア地域史研究のさらなる進展が期待される。

末筆ながら、本稿を借りて、開催にあたって会場をご提供くださったみなとびあの皆様、当日ご報告・ご来場いただいた諸氏、そしてシンポジウムの成功のために尽力されたすべての方々に厚く御礼を申し上げます。